

修士論文・卒業論文執筆要項

広島大学大学院人間社会科学研究科教育科学専攻英語教育学領域

English Language Education Major
Educational Design for Teacher Educators Program
Division of Educational Sciences
Graduate School of Humanities and Social Sciences
Hiroshima University

&

広島大学教育学部第3類（言語文化教育系）英語文化系コース

Program in English Language and Culture Education
Cluster 3: Language and Culture Education
School of Education
Hiroshima University



2003年作成

2014年改訂 / 2016年修正 / 2018年修正 / 2021年3月修正 / 2021年9月修正 /

2022年7月修正

日本語または英語での執筆とする。

卒業論文は、日本語なら 12,000 から 16,000 文字、英語なら 6,000 から 8,000 語とする（ただし、表紙、謝辞、目次、引用文献リスト、付録はこの語数にはカウントしない）。どちらの言語で執筆しても A4 用紙 1 枚の英文の要約をつけ、その英語の質は重要な評価材料とする。

修士論文は、日本語なら 20,000 から 24,000 文字、英語なら 10,000 から 12,000 語とする（ただし、表紙、謝辞、目次、引用文献リスト、付録はこの語数にはカウントしない）。どちらの言語で執筆しても、事務に提出する日本語での要旨に加えて、A4 用紙 2 枚の英文の要旨を提出すること。その英語の質は重要な評価材料とする。

1. 書式設定

ページ設定

上余白	: 26.0mm	左余白	: 39.0mm	1 ページ行数	: 30 行
下余白	: 26.0mm	右余白	: 26.0mm	フォント	: Times New Roman
				文字サイズ	: 12pt (目安)

表紙 …実例 1 参照。英語版と日本語版をそれぞれ参照。

謝辞 (ACKNOWLEDGEMENTS)

量や内容は自由（1～2 ページの人が多い）だが、お世話になった方の名前は絶対に間違えないように気をつけること。

目次 (CONTENTS) …実例 2 参照。英語版と日本語版をそれぞれ参照。

各章のタイトルページ …実例 3 参照。英語版と日本語版をそれぞれ参照。以下は英語で論文を執筆する場合の注意事項だが、日本語で執筆する場合も適宜従うこと。

- ・ CHAPTER : 4 行目に CHAPTER NO., 6 行目にタイトルを大文字で表記（センタリング）。
- ・ SECTION : 1 行空けて Chapter No., Section No., タイトルの順に大文字で表記（左寄せ）
（例： 2.1 LITERATURE REVIEW）。

2. 本文（以下は英語で執筆する場合を中心に述べているが、日本語で執筆する場合も適宜従うこと）

2.1 書式に関する注意事項

フォントや文字のサイズ

本文中の文字のフォントやサイズは統一（目安：日本語は MS 明朝で 10.5pt，英語は Times New Roman で 12pt）し、途中で変更しない。（ただし、タイトル、図、表、添付資料ではこの限りではありません。見やすさと分かりやすさを優先してください。）

スペース (Spacing) (英語で論文を執筆する場合のみ注意すること)

半角スペース 1 つ: カンマ・コロン・セミコロン, イニシャルや参考文献に用いるピリオドの後

半角スペース 2 つ: 文の区切りとなる句読点 (ピリオドや疑問符など) の後

※例外※ 半角スペース不要: 略語内のピリオドの後 (e.g., a.m., i.e., etc.) など

省略形 (Abbreviation)

本文中で初めて使用される際に, その省略形が何を表しているのかを先に表記する。

(例) ... the generic issues problematical here in more specific foreign language (FL) terms.
過剰に使用すると, 文字としては簡潔であっても, 意味を理解しにくくなるので注意する。

斜体 (Italic) (英語で論文を執筆する場合のみ注意すること)

専門用語の導入 (初出時のみ) や, 強調, 英語ではない語を斜体字で書く。

学術論文によく使われるラテン語由来の表現 (例: a posteriori / et al. / a priori / perse / ad lib / vis-à-vis) は斜体にする必要はない。

2.2 倫理的な問題に関する注意事項

参加者や調査協力者に関する記述

代名詞など性別を伴う語 (例: nurse を she で受ける→he/she, police“man”など) に注意。

年齢は厳密な歳を用いて, 「18 歳以上」などの表現は避ける。英語では年齢層に応じた表記をすること。(例: 中等教育までの人…boy and girl / young man and young woman / male

adolescent and female adolescent, 18 歳以上…men and women, 65 歳以上…older person)

人種, 民族, 障害等について偏見のない表現を用いる。

※個人や団体が特定されるような情報の守秘義務があるため, データの管理だけでなく, 記述の段階でも注意を払うこと。

剽窃 (ひょうせつ, Plagiarism)

他者の言葉や考えを自分のもののように主張してはならない (「2.4 引用」参照)。過去に論文を出したことがある場合, 自分の言葉であっても同じ文章を使ってはならない。著作権に関わる図表を使用する場合, 著作権所有者から許可を得たことを明記する。

2.3 脚注 (Footnotes)

本文に入れるほど重要ではない, あるいは本文の流れが悪くなる場合や, 添付資料にするほど長くない説明を加えたい場合に用いる。当該ページの下か, 章ごとに最後のページにまとめる。

(例) Footnote numbers should be superscripted, like this¹. (The number falls inside a closing parenthesis if it applies only to matter within the parentheses, like this.²) Subsequent references to a footnote should be

like this (see Footnote 1).

各章の最終ページ例

NOTES TO CHAPTER 2

1. Turn-constructual units is the minimum unit of a turn that can stand alone, and . . .

(1行空ける)

2. *****

Word の上付き文字は、「ホーム」タブに含まれる「x²」を使用することができる。

2.4 引用

直接引用

他者の研究，自己の過去出版された研究，テスト項目の複製，そして調査協力者への一語一語の指示から言葉を直接引用する際はその言葉をそのまま書き写すこととなる。引用の際は著者，年，特定のページを記す。

*本文中で直接引用したいが，ページ数がない場合 (e.g., Web サイトや電子書籍)。

◇ 見出しやセクション名を付記する。長くなっても構わない。

“they should be” (Tanaka & Suzuki, 2015, XXX section).

◇ パラグラフ番号を付記する。ない場合は数える。

. . . they also “need to stockpile their emotional reserves” to ensure adequate support from family and friends (Chamberlin, 2014, para. 1).

◇ 見出しやセクション名とパラグラフ番号を組み合わせる。

. . . “people who are better at rhythmic memory skills tend to excel at language skills as well” (DeAngelis, 2018, Musical Forays section, para. 4).

引用が 40 語未満のとき

(英語) ダブルクオーテーションマーク (“ ”) でその引用を囲んで文章中に組み込む。

(日本語) カギかっこ (「 」) でその引用を囲んで文章中に組み込む。

(例) . . . , Robbins et al. (2003) suggested that the “○○○” (p. 541), contributing to an . . .

(例) . . . , Robbins 他 (2003) は「○○○」(p. 541)と述べ. . .

(例) . . . , whereby “○○○” (Csikai & Chaitin, 2006, p. 112).

(例) それに対して, 「○○○」(Csikai & Chaitin, 2006, p. 112) とする見解が示されている。

引用が 40 語以上のとき

引用符は使用せず，独立のブロックとして示す。新しい行で始め，左余白から約半インチ（半角スペース 5 つ程度）インデントする（新しい段落と同じ場所）。引用の中で段落が変わる場合，さらに半インチをインデントする。引用の最後では，最後の句読点の後にカッコをして情報源を記載する。

2.5 図 (Figure) と表 (Table)

- 文章で書いた方が分かりやすいのか、図表にした方が分かりやすいのか、よく考える。
- 図表が何を表しているのか分かるようなタイトルをつける。
- 図表のあるページに本文もある場合、図表と本文の間に空行を設ける。
- 表の中で省略形が用いられる場合は、*Note*. として説明を加える。
- 3種類の注釈がある：①→②→③の順で改行して記載
 - ① **General Note** : 表中の情報に関する全体的な注釈。 *Note*. と書いて始める。
 - ② **Specific Note** : 上付き文字の説明など。 a などと書いて説明を始める。
 - ③ **Probability Note** : *p* 値のアスタリスクなど。

Table 1

Descriptive Statistics of Listening Comprehension Tests

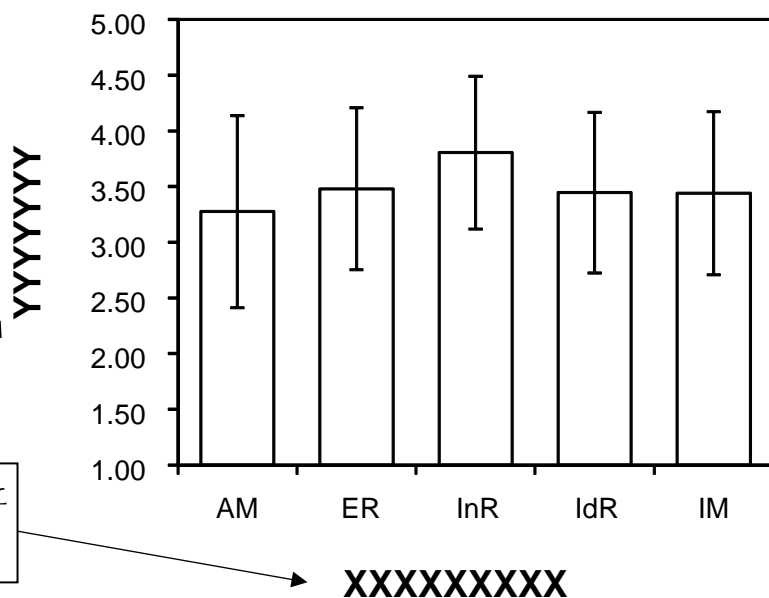
Group	<i>n</i>	Pre-test				Post-test			
		<i>M</i>	<i>SD</i>	Minimum	Maximum	<i>M</i>	<i>SD</i>	Minimum	Maximum
A ^a	25	53.97	12.40	31	70	60.14	9.87	38	73
B ^b	23	55.23	11.77	34	68	73.42	6.13	65	88

Note. XXXXXXXXX.

^aXXXXX. ^bXXXXX.

Figure 1

Learners' Motivation Levels



Note. Error bars stand for standard deviations. AM = amotivation; ER = external regulation; InR = introjected regulation; InR = identified regulation; IM = intrinsic motivation. The classification was adopted from Self-Determination Theory (Deci & Ryan, 2002).

図番号は太字。表のタイトルは斜体で、全ての内容語と4文字以上の機能語を大文字で始める。

縦線は書かない。

左寄せ。

Probability Note を書く場合は、この後で改行して **p* < .05. ***p* < .01 のように記載。

数字は中央揃え。

図のフォントは Times New Roman でなくて良い。

x 軸, y 軸に
タイトル

XXXXXXXXXX

2.6 統計 (Statistics)

統計に使われる記号は斜体にする。

(例) $F(1, 53) = 10.02$ t test $N = 409$ $n = 25$ M SD df

最大値が 1 以下の数値 ($-1 \leq r \leq 1$ や $-1 \leq p \leq 1$ など) について書く場合は、小数点から書き始め、小数点第 2 位～第 3 位まで記せばよい。

(例) Excel などでは 0.35210583... と記された場合、本文や表の中では $r = .35$, $p = .02$ と記載する。 p 値については、 $p < .05$ などのように記入する例が古い文献には多いが、最近では厳密な数値 (例: $p = .04$) を記入するのが通例である。また、0.01 未満になる (0.000000000000 などのような表示が出ることもある) 場合は、 $p < .01$ とする ($p = .00$ とは書かない)。

3. 参考文献 …実例 4, 5 参照

ここでは、英語論文に関しては心理学系の研究で一般的に用いられる APA (第 7 版) の形式を、日本語論文については、廣森 (2020)¹ による、APA (第 7 版) に準拠しつつ国内の代表的な英語教育ジャーナル (*ARELE*, *JACET Journal*, *JALT Journal*) の規定を適宜反映させた形式を参考としている。しかし、言語学、文学、など分野によって異なる形式が用いられる。論文を投稿するような場合はそれぞれの雑誌の規定に則るが、卒論や修論の場合、所属するゼミの教員の指示に従うこと。また、どの形式を使用する場合でも、その型で統一し、不ぞろいにならないように注意する。

*以下の引用例には、APA 第 7 版や APA の Web サイト、廣森 (2020) で扱われている例が含まれている。

[基本の型]

英語論文

本や雑誌 (ジャーナル) は斜体。
雑誌の場合のみ、各単語を大文字にする。

ページ番号は en dash (midsized dash) でつなぐ。

名字, 名前の頭文字. (年). 論文タイトル. 雑誌タイトル, 巻(号), ページ.

<https://doi.org/xxxx>

Pae, T. (2012). Skill-based L2 anxieties revisited: Their intra-relations and the inter-relations with general foreign language anxiety. *Applied Linguistics*, 33(2), 1–22. <https://doi.org/10.1093/applin/ams041>

doi は URL の形 (<https://doi.org/xxx>) で書く。doi の後ろにはピリオドをつけない。

¹ 廣森友人 (2020). 「リソース編」廣森友人 (編). 『英語教育論文執筆ガイドブック ジャーナル掲載に向けたコツとヒント』(pp. 134–157) 大修館書店.

DOIがあれば書く。URLはeBookの場合。

英語の本

名字, 名前の頭文字. (年). 本のタイトル (7th ed.). 出版社. DOI or URL

O'Malley, J. M., & Chamot, A. U. (1990). *Learning strategies in second language acquisition*. Cambridge University Press.

※出版社の地名は書かない。

※Publishers, Co., Inc.などの余分な用語は省略する。Books や Press は残す。

※ 3人以上の著者を文中で引用するとき、APA（第7版）では、初出から「筆頭著者+et al.」。“et al.”は“and others”の意味。日本語論文では“et al.”の代わりに「他」を用いる。

2人のとき O'Malley and Chamot (1990) または (O'Malley & Chamot, 1990)

3人のとき O'Malley, et al. (1989) または (O'Malley, et al., 1989)

田中他 (2020) または (田中他, 2020)

<編集された本で、各章を何人かで分担している本。編集者が1人の場合>

名字, 名前の頭文字. (年). 章のタイトル. In 名前の頭文字. 名字 (Ed.), 本のタイトル (2nd ed., pp. ページ). 出版社. DOI or URL

Huebner, T. (1995). The effects of overseas language programs: Report on a case study of an intensive Japanese course. In B. F. Freed (Ed.), *Second language acquisition in a study abroad context* (pp. 171–194). John Benjamins.

<編集者が2人以上の場合>編集者の&前にはカンマが付かないことに注意。

名字, 名前の頭文字. (年). 章のタイトル. In 名前の頭文字. 名字 & 名前の頭文字. 名字 (Eds.), 本のタイトル (2nd ed., pp. ページ). 出版社. DOI or URL

Balsam, K. F., Martell, C. R., Jones, K. R., & Safren, S. A. (2019). Affirmative cognitive behavior therapy with sexual and gender minority people. In G. Y. Iwamasa & P. A. Hays (Eds.), *Culturally responsive cognitive behavior therapy: Practice and supervision* (2nd ed., pp. 287–314). American Psychological Association. <https://doi.org/10.1037/0000119-012>

<翻訳された本を活用した場合>

Piaget, J. & Inhelder, B. (1969). *The psychology of the child* (H. Weaver, Trans.; 2nd ed.). Basic Books. (Original work published 1966)

※本文中では、上記の文献であれば Piaget and Inhelder (1966/1969)と記す。

<英語で論文を書く際に、他の言語の論文・書籍を活用した場合>

[]内に論文・書籍タイトルの翻訳を記入する

Chaves-Morillo, V., Gómez-Calero, C., Fernández-Muñoz, J. J., Toledano-Muñoz, A., Fernández-Huete, J., Martínez-Monge, N., Palacios-Ceña, D., & Peñacoba-Puente, C. (2017). La anosmia neurosensorial: Relación entre subtipo, tiempo de reconocimiento y edad [Sensorineural anosmia: Relationship between subtype, recognition time, and age]. *Clínica y Salud*, 28(3), 155–161. <https://doi.org/10.1016/j.clysa.2017.04.002>

Hinomori, T. (2015). *Eigo gakushu no mekanizumu: Daini gengo shutoku kenkyu ni motozuku koukateki na benkyoho* [Mechanisms for learning English: Effective study methods based on second language acquisition research]. Taishukan Shoten.

Web 関連

APA 第 7 版では、基本的に Retrieved from は書かない。ただし、頻繁に内容が更新されるものや、現時点で見ることができない Web ページなどの場合はアクセスした日と Retrieved from を書く。
<Web サイト>

American Psychological Association. (2020). *Journal Article Reporting Standards (JARS)*. <https://apastyle.apa.org/jars/quantitative>

<オンラインジャーナル>

Rabbidge, M., & Chappell, P. (2014). Exploring non-native English speaker teachers' classroom language use in South Korean elementary schools. *TESL-EJ*, 17(4). <http://www.tesl-ej.org/wordpress/issues/volume17/ej68/ej68a2/>

<eBook や Kindle のような電子書籍>

内容が同じであれば、書籍もしくは電子書籍のどちらを使用したか記載する必要はない。DOI がある場合は DOI を、URL がある場合は URL を記す。

Sapolsky, R. M. (2017). *Behave: The biology of humans at our best and worst*. Penguin Books.

Jackson, L. M. (2019). *The psychology of prejudice: From attitudes to social action* (2nd ed.). American Psychological Association. <https://doi.org/10.1037/0000168-000>

Svendsen, S., & Løber, L. (2020). *The big picture/Academic writing: The one-hour guide* (3rd digital ed.). Hans Reitzel Forlag. <https://thebigpicture-academicwriting.digi.hansreitzel.dk/>

<政府や研究・教育機関が著者の報告書など>

文部科学省 (2013). 『平成 24 年度「外部検定試験の活用による英語力の検証」報告書』

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1332393.htm

報告書に限らず、本の場合なども、著者が団体の場合は団体の正式名称を書く。

4. 付属資料 (Appendix) ※複数形は Appendices

付属資料には、質問紙調査で用いた用紙や資料、本文中では文章の流れを阻害するために記載しなかった細かいデータなどを載せる。

実例 1 : 表紙 (英語)

タイトル

Effects of English Immersion Classes at a Japanese Junior High School:
Comparison Between Native- and Non-Native Teachers

修士の人 :

A Thesis
Presented to
Graduate School of Humanities and
Social Sciences
Hiroshima University
In Partial Fulfillment of the
Requirements for the Degree of
Master of Education

A Thesis
Presented to
School of Education
Hiroshima University
In Partial Fulfillment of
the Requirements for the Degree of
Bachelor of Education

修士の人 :

English Language Education Major
Educational Design for Teacher Educators Program
Division of Educational Sciences
Graduate School of Humanities and Social Sciences
Hiroshima University

by

Hanako Kagamiyama

Program in English Language and Culture Education
Cluster 3: Language and Culture Education
School of Education
Hiroshima University

January 2015

実例 1：表紙（日本語）

タイトル

日本の中学校におけるイマージョンクラスの効果の研究：

母語話者と非母語話者の比較を通して

修士の人：

広島大学大学院

人間社会科学研究科

教育科学専攻

教師教育デザイン学プログラム

英語教育学領域

修士論文

広島大学

教育学部第3類（言語教育文化系）

英語文化系コース

卒業論文

鏡山 花子

2015年1月

実例 2 : 目次 (英語)

CONTENTS

ACKNOWLEDGEMENTS.....	ii
CONTENTS.....	iii
Chapter	
1. INTRODUCTION.....	1
NOTES TO CHAPTER 1.....	4
2. LITERATURE REVIEW.....	5
2.1 Listening as an Important and Difficult Skill.....	5
2.2 Learner Strategies.....	6
2.2.1 Definition and Classification of Learner Strategies.....	6
2.2.2 Strategies Used by Skilled Listeners.....	9
2.2.3 Changes in Learners' Strategy Use.....	10
2.3 Studies on Effects of Study Abroad.....	13
2.3.1 Proficiency Development throughout Study Abroad.....	13
2.3.2 Learner Strategies in Study Abroad Context.....	15
2.4 Overview and Research Questions.....	16
3. STUDY 1: LISTENING COMPREHENSION STRATEGIES USED BY JAPANESE EFL LEARNERS BEFORE AND DURING A STUDY ABROAD PROGRAM.....	21
3.1 Methods.....	21
3.1.1 The Participants.....	21
3.1.2 Materials.....	22
3.1.3 Procedure.....	23

LIST OF FIGURES

Figure 1. Kintsch's construction-integration model (Adapted from Harley 2008).....	4
Figure 2. Overview of the frameworks in the model.....	18

LIST OF TABLES

Table 1. Cognitive Processes during Listening and Strategies which Skilled Listeners Use (based on O'Malley and Chamot (1990)).....	9
Table 2. Previous Studies on Proficiency Development throughout a Study Abroad Program.....	14

実例 2 : 目次 (日本語)

目次

謝辞.....	ii
目次.....	iii
章	
1. イントロダクション.....	1
第 1 章の注.....	4
2. 先行研究.....	5
2.1 ○○○○○.....	5
2.2 ○○○○○.....	6
2.2.1 ○○○○○.....	6
2.2.2 ○○○○○.....	9
2.2.3 ○○○○○.....	10
2.3 ○○○○○.....	13
2.3.1 ○○○○○.....	13
2.3.2 ○○○○○.....	15
2.4 ○○○○○.....	16
3. 調査 1 : ○○○○○.....	
3.1 研究方法.....	
3.1.1 参加者.....	21
3.1.2 調査材料.....	21
3.1.3 調査手順.....	21

圖一覽

圖 1.	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○.....	4
圖 2.	○○○○.....	18

表一覽

表 1.	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○.....	9
表 2.	○○○○.....	14

実例 3 : タイトルページ (英語)

CHAPTER 1

INTRODUCTION

The present study aims to clarify the difference in listening comprehension strategy use by Japanese learners of English as a foreign language (EFL) before and during a study abroad program.

Listening is admittedly an indispensable skill to acquire a language, whether it is the first or a second language (L2)¹. Since listeners deal with aural information, without letters, it is useful for illiterate L2 learners. The fact that “foreign language activities”² introduce pupils to oral/aural activities (Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT), 2008) can be a case to illustrate that listening is one of the most essential skills. It is a basic skill, to be sure, but it also becomes exceedingly difficult when the material involves long and complicate structure (Brown, 1995). Learners are required to actively listen to L2, while they need preparations for listening, selective focus, attention to non-verbal communication, and appropriate response (Rost, 2002).

1.1 THE SCOPE OF THIS STUDY

Recently, teaching “how to listen” draws EFL teachers’ attention (Flowerdew & Miller, 2005; Graham, Santos, & Vanderplank, 2008). In Japan as well, instruction for effective listening activity has been one of high school teachers’ concerns after 2006 when listening section was introduced in the national university entrance examination. As a way to teach “how to

実例 4 : 引用文献リスト (英語)

REFERENCES

- Al-Gahtani, S., & Roever, C. (2015a). The development of requests by L2 learners of modern standard Arabic: A longitudinal and cross-sectional study. *Foreign Language Annals*, 48(4), 570–583. <https://doi.org/10.1111/flan.12157>
- Al-Gahtani, S., & Roever, C. (2015b). Multiple requests in Arabic as a second language. *Multilingua*, 34(3), 405–432. <https://doi.org/10.1515/multi-2014-0056>
- Anderson, J. R. (1985). *Cognitive psychology and its implications* (2nd ed.). Freeman.
- Bailey, K. M. (1983). Competitiveness and anxiety in adult second language learning. In H. Seliger & M. H. Long (Eds.), *Classroom oriented research in second language acquisition* (pp. 67–103). Newbury House.
- Brantmeier, C., Vanderplank, R., & Strube, M. (2012). What about me? Individual self-assessment by skill and level of language instruction. *System*, 40(1), 144–160. <https://doi.org/10.1016/j.system.2012.01.003>
- Collentine, J. (2009). Study abroad research: Findings, implications, and future directions. In M. H. Long & C. J. Doughty (Eds.), *The handbook of language teaching* (pp. 218–233). Blackwell.
- Goh, C. (2000). A cognitive perspective on language learners' listening comprehension problems. *System*, 28(1), 55–75. [https://doi.org/10.1016/S0346-251X\(99\)00060-3](https://doi.org/10.1016/S0346-251X(99)00060-3)
- Goh, C., & Hu, G. (in press). Exploring the relationship between metacognitive awareness and listening performance with questionnaire data. *Language Awareness*.
- Hiromori, T. (2015). *Eigo gakushu no mekanizumu: Daini gengo shutoku kenkyu ni motozuku koukateki na benkyoho* [Mechanisms for learning English: Effective study methods based on second language acquisition research]. Taishukan Shoten.
- Huebner, T. (1995). The effects of overseas language programs: Report on a case study of an intensive Japanese course. In B. F. Freed (Ed.), *Second language acquisition in a study abroad context* (pp. 171–194). John Benjamins. <https://doi.org/10.1075/sibil.9.11hue>
- Jacobs, A. M. (2018). The Gutenberg English Poetry Corpus: Exemplary quantitative narrative analyses. *Frontiers in Digital Humanities*, 5, Article 5. <https://doi.org/10.3389/fdigh.2018.00005>
- Llanes, À., & Muñoz, C. (2009). A short stay abroad: Does it make a difference? *System*, 37(3), 353–365. <https://doi.org/10.1016/j.system.2009.03.001>
- Rost, M. (2002). *Teaching and researching listening*. Person Education.
- Rost, M. (2011). *Teaching and researching listening* (2nd ed.). Person Education. <https://doi.org/10.4324/9781315833705>
- Rost, M., & Ross, S. (1991). Learner use of strategies in interaction: Typology and teachability. *Language Learning*, 41(2), 235–273. <https://doi.org/10.1111/j.1467-1770.1991.tb00685.x>

実例 5 : 引用文献リスト (日本語)

引用文献

- Al-Gahtani, S., & Roever, C. (2015a). The development of requests by L2 learners of modern standard Arabic: A longitudinal and cross-sectional study. *Foreign Language Annals*, 48(4), 570–583. <https://doi.org/10.1111/flan.12157>
- Al-Gahtani, S., & Roever, C. (2015b). Multiple requests in Arabic as a second language. *Multilingua*, 34(3), 405–432. <https://doi.org/10.1515/multi-2014-0056>
- Al-Gahtani, S., & Roever, C. (2018). Proficiency and preference organization in second language refusals. *Journal of Pragmatics*, 129, 140–153. <https://doi.org/10.1016/j.pragma.2018.01.014>
- American Psychological Association. (2020). *Publication manual of the American Psychological Association* (7th ed.). <https://doi.org/10.1037/0000165-000>
- Brown, J. D. (1996). *Testing in language programs*. Prentice Hall. (ブラウン, J (著), 和田稔 (訳) (1999). 『言語テストの基礎知識—正しい問題作成・評価のために』大修館書店.)
- 細馬宏通・菊地浩平 (編) (2019). 『ELAN 入門—言語学・行動学からメディア研究まで』ひつじ書房.
- 平本毅 (2017). 「発話順番の構築」串田秀矢・平本毅・林誠『会話分析入門』 (pp. 118–168) 勁草書房.
- 廣森友人 (2020). 「リソース編」廣森友人 (編). 『英語教育論文執筆ガイドブック ジャーナル掲載に向けたコツとヒント』 (pp. 134–157) 大修館書店.
- Leech, G. (2014). *The Pragmatics of politeness*. Oxford University Press. (リーチ, G. (著), 田中典子 (監訳). (2020). 『ポライトネスの語用論』研究社.)
- 文部科学省 (2018). 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 外国語編 英語編』開隆堂.
- 杉田由仁 (2014). 「トレーニング・ポートフォリオを活用した「英語科指導法」の授業効果」 *JACET Journal*, 58, 143–155.
- 清水崇文 (2009). 『中間言語語用論概論 第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク.
- Roever, C., & Kasper, G. (2018). Speaking in turns and sequences: Interactional competence as a target construct in testing speaking. *Language Testing*, 35(3), 331–355. <https://doi.org/10.1177/0265532218758128>
- 高木智世・細田由利・森田笑 (2016) 『会話分析の基礎』ひつじ書房.